



養鶏の夏場対策② ～残暑時期の対策も怠りなく

前号では、夏場対策を取り上げた。それから2ヵ月、夏本番を迎え暑さも続くため、9月以降の残暑にも備えたい。そこで今回は、前号の夏場対策の補足として、「残暑対策」について取り上げる。

●鶏舎環境の整備に努める

前回取り上げた太陽の熱線を反射するための屋根の白色塗装については、雨が降れば徐々にはがれるので、追加の塗装が必要な場合は行いたい。洗濯のりなどを液に混ぜると乾燥した後の石灰がはがれにくくなる。

暑い時期には清掃作業も大変だが、換気扇・送風機の掃除は風力、冷却効果を高める。飲水フィルターや給水ラインを洗浄することで清潔な飲水が提供でき、鶏の健康につながる。鶏舎の整理整頓も、ホコリを減らし気流をスムーズにするので鶏には効果的だ。少し涼しい日を見計らってでも環境整備に努めたい。

最近は飲水冷却装置も実用化されている。冷たい水は成績を上げることが実証されているので(図1)、もし鶏舎を新築する場合は採用を検討してみしてほしい。

●最も重要な衛生対策

以前は蚊が媒介する*ロイコチトゾーン症が天敵だったが、一定の対策がなされており、夏に恐ろしい鶏病というものの特にはないが、コクシジウム症には注意が必要だ。

コクシジウムは鶏糞など鶏の体外で成熟して鶏の体内に戻って増殖するが、夏は鶏体外での成熟が早く蔓延しやすいため、鶏糞は速やかに片づけるべきである。鶏糞にウジが多く発生すると、ウジが食べた鶏糞が液状化し、ますます処理がしにくくなってしまふ。有毒ガスが発生すれば鶏舎の環境が一挙に悪化するので、鶏糞処理は最重要課題である。

また、残暑期はへい死する鶏が増える時期でもあり、すべて撤去することが難しい場合もあるだろう。しかしケージ内にへい死鶏を放置することは、衛生状態を悪くして病気の蔓延につながるほか、卵がへい死鶏にぶつかるため鶏卵の品質低下にもつながる。現実には人手が足りないことが多いが、できる限り早期に片づけるように努力を行いたい。

●温度管理と体重測定の徹底

昼は暑い夜は少し涼しい、このような時期に行う作業をここでは残暑対策としたい。

まず温度管理である。夜間、温度を下げて鶏をゆっくり休ませるため、換気、周囲への散水は夕方に集中的に行う。さらに、体重測定も重要である。本来は暑くなる前や暑い最中にも行うべきだが、体重が減っていないか、不自然に増えていないかチェックしたい。成鶏の体重はゆっくり増えていくのが理想だが、夏場の飼料摂取量低下による体重減少や、産卵障害でカロリー消費が減ったことによる体重増加は望ましくない。鶏の健康管理を最も簡単かつ確実にを行うために体重測定を行い、秋以降の産卵ピーク復活に備えたい。

飼料摂取量を増やすため夜間に行っていた給餌(ミッドナイトフィーディング)は鶏の体に負担をかけるため、3ヵ月以上は行わないこと。戻す際は2週間以上かけ夜間の給餌時間をゼロにする(図2参照)。

●定期的な卵質のチェックを

卵質の定期的な検査も行いたい。卵殻質、ハウユニット、卵黄色をこまめにチェックし、悪化していたら対策を行う。元に戻ったらお金のかかる対策をやめる、ということが重要である。毎日2個、先週の卵と今日のも卵質を調べるのに効果的だ。

夏は卵をあまり産まない上よく割れるため、夏場対策は無から有を産むことである。秋が来る前に、1日でも早い取り組みを行いたい。

図1: 夏場の給水温が産卵率に与える効果(Bell,1987)

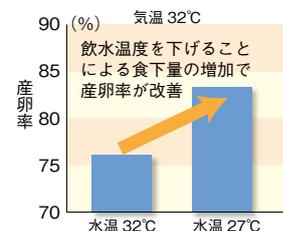
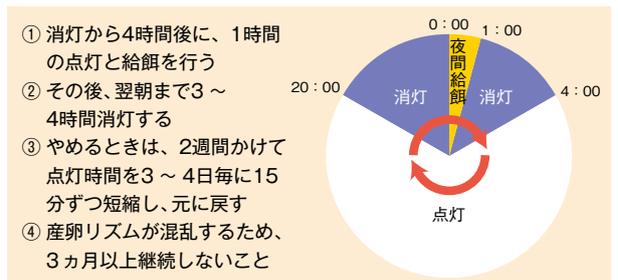


図2: 夜間給餌の方法



*裏表紙に用語解説